日本歯科医史学会会誌・第15巻
第3号通巻56号・平成元年3月

Wells 記念切手運動の意味*

中　原　　泉**

要　旨

麻酔法の発見者 H. ウェルズの顕彰を期して，彼の記念郵便切手を発行すべく，現在アメリカで展開されている請願運動と，わが国における支援活動の経過を報告した．あわせて，なぜ今ウェルズの切手をだす必要があるのか，その理由と意義について説き，先人ウェルズの再評価を促した．

（キーワード）

麻酔法，Horace Wells, W.T. G. Morton，吸入麻酔法，笑気ガス，医人切手

Horace Wells は，1844年12月16日コネチカット州ハートフォードで，亜酸化窒素（いわゆる笑気ガス）を用いて，初めて無痛抜歯に成功した．ハートフォードの医師会・歯科医師会では，1994年がウェルズの麻酔法発見150年に当たることから，彼の記念郵便切手を発行すべく，現在，同医学・歯科医学歴史博物館の L.F. Menczer 館長 (DDS) を中心に，アメリカ郵政省に対し請願運動を展開している（図1）．

アメリカでは毎年，郵政省に対し各界各団体から，数千名にのぼる肖像切手発行の請願があるという．省内に設けられた市民切手顧問委員会が，それらを時間をかけて審査する．同委員会は，二ケ月毎に開かれる．採択の基準は，(1) 多数の候補者から選ばれうる顕著な功績を有すること，(2) 全国的な支援があること（国際的な支援があればなお良い）とされている．要は，委員会メンバーにいかに説得力のあるアプローチをするかである．

図1　ウェルズの切手デザイン

この請願には普通4，5年を要することから，ハートフォードではすでに1985年2月から運動を始めている．これは発行が決定されるまで続けられる訳だが，彼らは一応1992年をメドにしている．

昨年（1987年）秋，私は Dr. メンザーから請願運動への協力を要請された．そこで私は早速，『ウェルズ記念切手発行の請願に協力する会』を結成し，賛同の署名を集めるキャンペーンに乗りだした．

記念切手というと，他愛のない趣味と受けとられがちであるが，郵便切手は社会生活にとけこんだ身近な必需品で，労せずして一般大衆の目にふ

---

* The meaning of H. Wells commemorative postal stamp campaign

** Sen NAKAHARA: The Nippon Dental University School of Dentistry at Niigata 日本歯科大学新潟歯学部

本稿の要旨は，第16回日本歯科医史学会学術大会（1988年10月）において口演した．

れるものである．なかでも肖像切手は，世に先人の名と功績を知らしめるという意味から，一種の啓蒙切手ということができるだろう．それゆえに，銅像や記念碑などに較べて最高の人物顕彰といえる．

肖像切手の発行には，その国のお国柄がでている．フランスでは A. Paré（1943年）はじめ医学者の切手は百種類にも及び，毎年数枚の医人切手が刷られている．イギリスでは切手の顔は国王や女王に限っているので，医学者は消毒法の開発者 J. Lister にとどまる．それも，リスター滅菌法百年記念にだされたその切手（1965年）の半側は，エリザベス女王の肖像が占めているのである．同国の切手には，人類の恩人，牛痘法の E. Jenner さえも見られない．

こうした肖像切手には，必ずしも自国の生んだ偉人を採用するとは限らない．友好国や発展途上国が，国策として先進国の偉人切手を量産することは珍しくない．たとえば，故国では無視されたジェンナーは，ギニアはじめアフリカ，中南米などの小国9ケ国から発行されている．

欧米はじめ多くの国では，ノーベル賞受賞者を中心に医人切手は少なくないが，わが国では，1949年に文化人切手の第1号として，野口英世が現れただけである．（同じく文化人切手としてだされた森鷗外（1951年）は，文学者として登場した．）

さて，歯科医師として切手を飾ったのは，古今東西二人だけである．一人は，歯科医学の父と謳われる P. Fauchard で，1961年のフォシャール死去二百年記念祭に際し，フランスで発行された．自著「外科歯科医」を携えた彼の姿が，緑と黒の二色刷りで画かれている．あまりよい出来映えとはいいがたいが，とにかく世界で最初の歯科医師切手である（図2）．

もう一枚については，後に述べる．

なぜ今，ウェルズの記念切手を発行する必要があるのか，その理由は二つある．

第一は，C.W. Long を記念する肖像切手が，すでに出されているからである．彼はウェルズの公開手術から5年も経ってから，ノコノコとでてきて，1842年にすでに麻酔を行っていたと強弁した医師である．彼の切手は出身地ジョージア州ジェファーソンの積極的な運動によって，1940年に著名科学者の一人として発行された（図3）．

図2　フォシャールの切手

図3　ロングの切手

幸いなことに，その切手には麻酔法や称号に関しては一切記されていない．事実，ロングは麻酔法の開発とその発展になんら関与していない．遅れてきた男ロングを，時代に先駆したウェルズと同等には扱えない．自らの創見を果敢に実行に移した者だけが，パイオニアたりうるのである．ところが残念ながら，未だに日米の医学界にはとかくロングを優先する傾向がみられるのだ．

第二には，フォシャールに次ぐもう一枚の歯科医師切手として，W.T.G. Morton の肖像切手が

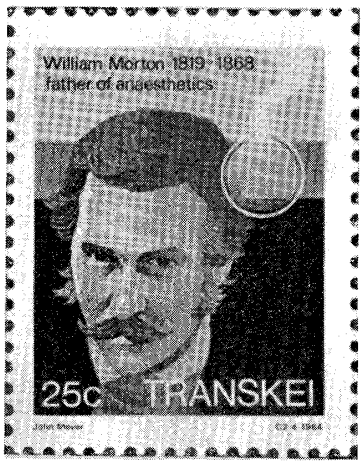

図 4　モートンの切手

出されているからである．ウェルズを追った彼は，1846年10月16日マサチューセッツ総合病院(MGH)において，硫黄エーテルを用いて華々しい成功をおさめ，エーテル吸入麻酔法を世界に広めた．

彼の切手は1984年に南アフリカのトランスカイで，四種類の発明者切手の一枚として発行された．エーテルのフラスコを添えて，精悍な風貌のモートンが写実的に画かれ，「麻酔法の父」という尊称を与えられている（図4）．

この切手にみられるように，ウェルズは失敗者，詐欺師というイメージが拭い去られず，永らくモートンの成功と名声の陰で等閑に付されてきた．しかし，モートンの果した役割と歴史的事実は，その人物評価においてはあくまで峻別されなければならない．

すでに，1864年にアメリカ歯科医師会が，1870年にはアメリカ医師会が，ウェルズを「麻酔法の発見者」として公式に認定しているのである．後人は先人が果した役割を過小過大視せず，史実を正当に評価しなければならない．請願中のウェルズの記念切手（25 c）のデザインには，「麻酔法の発見者」と銘記されることになる．これによって，ウェルズの功績を再認識させ，彼の再評価を期することは，アメリカにとどまらず，世界の斯界にとってたいへん意義ぶかい．

私は昨年来，20余名の熱心な協力者の支援を得て，本キャンペーンを進めてきた．今も私のもとに，全国から請願の署名が集まってきている．現在までの一年間の状況(1988年10月1日現在)は，ウェルズの後裔である歯学部の麻酔・口腔外科関係853名，同じく医学部の口腔外科関係436名，日本歯科医史学会，日本医史学会を含む一般の方々2,671名，外国として韓国，中国，タイ，イスラエル，スイス，西ドイツ，イギリスの7ケ国から304名，総計4,264名に達している．

私は Dr. メンザーと連絡を取りながら，本年（1988年）1月に2,500名分の署名を，アメリカ郵政省に送付した．折返し郵政局長から届いた返信は，ご承知のとおり毎年数千名の請願候補者があり，貴意に沿うことは至難である旨，まことに事務的な素気ない文面であった．

9月に，第2回分として1,500名を送った．同じくシビアな文脈ながら，「外国の支持者が，このように大きな関心を寄せることはきわめて稀である．貴方の努力はたいへん印象的である」という返事がきた．前回とはその反応に微妙な変化が感じられ，ひそかに意を強くしている．

今後も気長に，この請願運動をつづけていきたいと考えているので，よろしくご理解ご支援をお願いしたい．本誌上を借りて，今日までの経過報告にあわせて，これまでご協力をいただいた多数の方々に対し，深甚なる感謝を申しあげる次第である．